

Title	<書評> Bryan R. Wilson, "The Social Dimensions of Sectarianism : Sects and New Religious Movements in Contemporary Society", Oxford University Press, 1990
Author(s)	岡尾, 将秀
Citation	年報人間科学. 17 P. 259-P. 263
Issue Date	1996
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/3542
DOI	10.18910/3542
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

Bryan R. Wilson

*The Social Dimensions of Sectarianism:
Sects and New Religious Movements in Contemporary Society*

Oxford University Press, 1990.

岡尾 将秀

教団とは、血縁や地縁でなく、まさに宗教を契機として形成される宗教組織である。本書の著者フライアン・ウィルソンは、教団のうちでも特にセクトsectと呼ばれる教団を主な対象として、宗教を論じてきたイギリスの社会学者である。

一般的には、セクトという語は、「分派」と訳されることもあり、もともとヨーロッパのキリスト教教会(チャーチ church)に對比される語であった。つまり、教会区域の住民であれば自動的に加入させられたチャーチでの教義解釈や信仰実践に疑問をもつ人々が、より厳格で自発的な信仰に基づいて、ある指導者の下に集まり形成した教団がセクトであった。ところが、欧米におけるキリスト教(特にチャーチ)の社会的影響力が衰微するにつれ、依然としてキリスト教の信仰を厳格に維持しようとするセクトは、世俗社会との対比で認知されるようになってきた。

本書も、このような文化的、歴史的背景の下で現実に存在してきた教団としてのセクトの考察を基礎としている。ただ、題目の「社会的位相 social dimensions」という語からも、また、次のような全体の構成からも、本書がセクトの考察そのものを目的としていないことは明らかである。

全体は13の論文から成るが、序論の後、残りは大きく三部(それぞれ4論文)に分類されている。まず、第一部「存続——世界に對抗するセクト」では、法や世論の位相で顕在化した国家や家族、特定の機関とセクトとの対立問題がどのように起こるかが考察されている。次に、第二部「展開、広がり、主張」ではそうした対立の可

能性をはらむセクトが、特定の時代や文化の下でこれまでどのような運命をたどる傾向があったのが、主にアメリカのセクトを例にとつて、考察されている。最後に、第三部「現代のマイノリティー——新しい宗教運動 the new religious movements」では、もはやキリスト教、さらにはこれまでの宗教概念自体の枠内に納まりきれない現代の宗教動向をどのようにとらえていくべきかが考察されている。

まず、第一部の対立問題の考察から、本書が、セクトそのものよりも、セクトと外部の一般社会との関係、それも原理的ともいえる緊張関係を問題としていることがわかる。というのは、かつてのチャーチや現在の世俗社会（例えば家族や国家）の支配的な文化、制度の下では得られないような救済（典型的には来世での救済）を求め、そうした既存の支配的な文化、制度が排斥あるいは無視するような宗教上の観念、実践を保持していくこそが、セクトを特徴づけていたと考えられるからである。実際、つねにセクトは一般社会から「分離された separated」マイノリティとして存続してきたといえる。

ところが、このようにセクトを外部の一般社会との緊張関係でとらえることは、セクト以外の教団を理解する手がかりともなる。言いかえれば、特定の時代、文化の形成物としてのセクトの原理的な考察を、他の時代、文化の形成物としてのセクト以外の教団に応用できるのである。というのは、一般社会から分離され、それと緊張関係にあるのは、他の社会集団で苦難を経験した人々をまさに宗教

によって救済する教団それ自体の特性とも考えられるからである。第二部はこうしたセクトの考察の応用の準備段階にあるともいえ、特定の時代、文化下にある特定のセクトの考察を行なうだけではなく、外部の一般社会との緊張に対応し、絶えず変化していく宗教運動としてのセクトをとらえる視角がとり入れられる。したがって、アメリカのセクトの事例を考察しつつも、特に組織や技術の面でのような一般的な傾向がみられるのが問題となってくる。

そして、第二部の宗教運動としてセクトをとらえる視角が、最近の宗教動向を理解するために、さらに発表させられるのが第三部である。ここでは、セクトは、もはやセクトとしてではなく、かつての宗教運動の一つとしてのみ考察の対象となっている。というのも、欧米においてさえ、これまで支配的であったキリスト教が教団を規定する度合が低くなっていく上に、そもそもこれまでの伝統的な宗教概念（これ自体キリスト教の影響が強い）そのものの範中に入りきらない観念や実践を擁する教団が顕著になってきた事実があるからである。にもかかわらず、新しく台頭してきた教団も、現在の世俗文化の支配する一般社会において軽視される独自の観念と実践を保持するマイノリティであり、外部社会との緊張関係の下で展開する宗教運動の狙い手である点で、セクトに異ならない。したがって、ここでは、現代の宗教動向が、セクトとの差異のみならず、宗教運動としてどのような一般的な傾向をセクトと共有するのかが問題となるのである。

なお、こうした理論的な問題が、つねに現実存在したセクトも

しくは最近台頭した教団、それらの背景となる特定の時代、文化、制度の実例を通して考察されていることも本書の重要な特徴である。この特徴によって、本書は、つねに理論的一般化を目ざしつつも、現実の現象からの遊離を逃れているからである。そこで、次に、事例のとりあげ方にも注意を払いつつ、右の問題に対して実際に行われた考察の主要なものをみてみる。

第一部において最も具体的に挙げられた事例は、「エクスクルーシヴ・ブレズレン Exclusive Brethren」という文字通り閉鎖的な共同生活を営む英国のセクトである。このセクトは、宗教団体としての法的な認定をめぐって、認定機関と法廷で争うことになる。なぜなら、その独自の禁欲的な共同生活が、英国国教会の伝統に対応した古い法律によっては、「公的 public」だとは認められなかったからである。ここで重要なことは、この対立が、認定機関自体のセクトに対する敵対的な性格のためではなく、あくまで英国社会全体のセクトに対する対応の欠如を反映する古い法律のために生じたということである。この他、徴兵拒否をめぐる国家との対立、隔離的な共同生活をめぐる信者の家族との対立の他のセクトに関する事例についても同様なことがいえ、やはり一般社会とセクトとの価値観や生活態度の違い自体を反映した制度や世論のセクトへの配慮の欠如が原因となっている。

第二部の事例は大きく二つのタイプに分類される。一つは、主に、ヨーロッパで生まれ、チャーチや国家の支配を逃れ、アメリカに渡って拡大、発展したセクトである。この種のセクトは、チャーチや

国家による排斥のない多元的な宗教状況下で確かにその社会的勢力を伸ばしたが、経済発展に乗じた成員の社会的地位の上昇、官僚制の大規模な組織機構の導入、快楽志向的な文化の浸透といった一時期のアメリカに特有な社会状況も原因となって、世俗社会の価値観や生活態度への適応するために当初の厳格な信仰生活を放棄する傾向があった。この傾向は、あくまでアメリカのセクトに顕著にみられたものではあるが、教団が外部社会との緊張を妥協によって処理していかうとする点で、宗教運動の展開の一つと考えることもできる。

ところが、もう一つのタイプのセクトとして、アメリカで新たに生まれたセクト、あるいは革新運動や分派形成によって再活性化したセクトがある。これらのセクトは、現在の世俗社会において周辺のな地位にありながらも、信者一人一人の厳格な信仰に支えられた独自の文化と生活を保持している。しかも、注目すべき事実として、これらのセクトが再びヨーロッパで普及し始めるという事態が生じている。

この事態の典型的な事例として挙げられているのが、ベルギーの社会学者K・ドベラーレ Dobeelaereと共同でなされたベルギーのエホバの証人派 Jehovah's Witnessesの成員に対する質問紙とインタビューによる調査の結果である。そこでは、成員の入信の動機とその後の布教活動が焦点となっている。動機としては、やはり理論的には、世俗社会での剝奪経験が有力な要因である。しかし、やむをえずの世俗社会からの撤退という側面だけではなく、世俗文化に

はない宗教的理想に魅せられての積極的な入信という側面の事実が指摘されている。それ故、布教活動に関しても、世俗の職業労働を犠牲にしてまでの戸別訪問が日常的に行われることになるのである。ここで重要なことは、そうした献身的ともいえる布教活動を支える動機を生み出すような社会状況や宗教観念が現在の世俗社会において周辺のながらも存在し、やはり宗教運動の展開を方向づけていることである。

第二部がアメリカで一昔前台頭してきたセクトの事例に絞られているのに対し、第三部において考察の中心となる現在の宗教動向には、最近台頭してきたと想定される様々な種類の宗教に属する諸教団が含まれている。欧米の議論においてこれまで暗黙の前提とされる傾向のあったキリスト教のみならず宗教概念そのものの枠がとり払われ、呪術と現世志向的な救済観を特徴とする日本の新宗教教団 the new religions から、科学的な世界観や心理療法の技術を積極的に導入しているアメリカのサイエントロジー Scientology 教団までが含まれている。こうした新しい傾向が生じる背景には、呪術を原則として否定するキリスト教の社会的影響力の衰退に加え、科学の発達や制度的手続と組織運営の合理化によって、何らかの不合理な前提や方法を伴う宗教自体の社会的意義の低下をも意味するいわゆる世俗化のさらなる進行を読みとることができるといえる。つまり、現在の宗教動向は、世俗化のさらなる進行という社会全体の変動に反応しているがゆえに、セクトが主要な狙い手であった一昔前の宗教運動とは性格を異にする。「新しい」宗教運動なのである。

しかし、一方で、宗教運動というより一般的な視角に立てば、最近の教団とかつてセクトの間には、外部社会との関係や組織形態に関して多くの共通点がみられる。組織面で特に重要なものとして、カリスマ的指導者の存在、宗教エリートとしての聖職者と一般信徒間の序列関係の欠如がある。一般信徒自身がカリスマ的指導者の予言や模範に従って救済のための信仰実践を主体的に実行できるこのような組織形態においてこそ、現代の世俗社会の下でも独自の宗教観念を保持できると考えられる。とはいっても、外部社会との関係において、現代社会における世俗文化の優位の下で、教団は厳格な信仰実践の維持にしばしば失敗する。神聖であるべきカリスマの俗性の暴露、予言の失敗は、科学的な思考や技術の浸透した現代文化においては、ほとんど不可避である。たとえ避けられたとしても、教団の宗教的理想と外部社会の現実の乖離がつねに組織的運営上の問題としてつきまとう。

韓国生まれの統一教会 Unification Church のベルギー支部の事例（やはり K・ドベラーレとの共同調査）は、こうした不安定な組織事情の下に展開する宗教運動の現代における一つの方向を示唆している。体験談からは、極めて理想主義的な教義ゆえに外部の世俗社会の現実を否定しつつ、伝道や奉仕活動、信者の家族との関係を通じて世俗社会と接触せざるをえない教団運営の困難さを隔間みることができるといえる。この教団は、こうした外部社会の現実との緊張を、宗教上の理想、その下での閉鎖的な共同生活をより強固にすることに よって、処理しようとしているといえる。

一方、これとは逆に、宗教的理想や生活態度をより世俗文化に妥協させることで教団の存続をはかるもう一つの方向がある。この事例として、著者が「世俗化された宗教 a secularized religion」と呼ぶサイエントロジが挙げられている。ここでは、人格神や終末思想とは無縁の抽象的、体系的な独自の神学の下で、科学的な心理療法に似た手続きに従い、段階的な意識変容を遂げることが救済目標となっている。こうした「合理的な」救済観が、科学的思想と態度

が行き渡った現代の世俗文化の強い影響を受けていることは明らかである。それ故、著者は、この傾向を世俗化のさらなる進行に対する現代の教団の必然的な反応の一つとして重視し、この傾向にも対応するため、これまでの宗教的概念の修正を提案している。もちろん、体系的な概念構成ではなく、超経験的な世界観、儀礼、救済といった抽象的な項目の羅列にとどまっている。しかし、キリスト教以外の宗教伝統と現代の世俗文化の影響が射程に入られており、今後の研究に不可欠な試みとなっている。

以上のように、かつて欧米で支配的であったキリスト教の文脈から発生したセクトの事例の考察から出発しつつも、最終的には、さらなる世俗化と非キリスト教の宗教伝統に晒されている同時代の宗教動向の事例が考察されるに至っている。しかし、ここにも、考察対象も推移にもかかわらず、つねに教団と世俗社会との緊張を問題とし、その緊張に対応した教団の発生、存続のパターンを宗教運動というより一般的な視角から考察した本書の成果をよみとることができる。世俗社会に妥協する傾向のある教団がある一方で、閉鎖的

な信仰共同体を形成する教団がつねに存在し続ける状況は、セクトを主要な狙い手とする宗教運動にも現代の「新しい宗教運動」にも共通してみられるものである。

ただ、方向としてはより一般的な視角からの多様な現象の説明を目ざすとしても、現在の著者の関心がどの現象に根ざしたものなのかという問題は残される。この問題に関して明確な立場が主張されているわけではないが、そもそも本書の出発点としてのセクトの考察から教団と社会の緊張という根本的な問題が設定されたこと、現在でも活性化しているセクトが存在すること、さらに結局、題目に「セクト主義 sectarianism」と語が掲げられていることなどから、依然としてセクトが著者の問題関心の源泉となっている事実は否定できない。

とするなら、本書の一般化の成果である宗教運動の視角の独自の意義も、出発点であるセクトの考察との関連でこそ評価されることになる。例えば、今のところ理論的には有力な世俗化論や剝奪論よりも、一時期のアメリカのセクトの動態に見出された一般的傾向からの宗教運動の説明の方が、また、「新しい宗教運動」に関しても、マイノリティとしてのセクトとの類似性からの説明こそが、本書固有の意義を持っているといえる。さらにいえば、このような説明こそが、他の時代、文化にある教団の考察を基礎とした宗教運動の説明とも比較可能となり、現実から遊離しない形で宗教運動論のさらなる一般化にも貢献すると思われる。